

授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討

福ヶ迫善彦¹⁾ 坂田利弘¹⁾

愛知教育大学¹⁾

Effects of microteaching on the reflection skill of students in Department of Education for Teacher Education

Yoshihiko FUKUGASAKO¹⁾, Toshihiro SAKATA¹⁾

1) Aichi University of Education

Key words: 模擬授業, 授業省察力, 反省的授業実践, 授業観察力

I. はじめに

愛知県には、小学校987校、中学校439校、高校226校がある(2007年5月現在)。図1は公立校に勤務する教員数を年齢群別に示している。

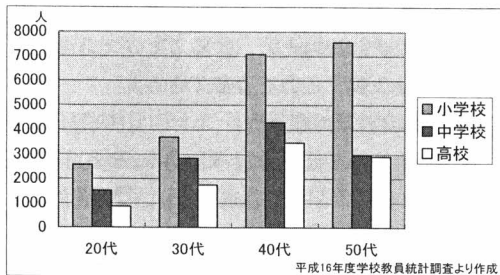


図1 年代別に見た愛知県学校教員数の推移

小学校の教員数をみると、年齢が高くなるにつれて教員数は多く、中学校や高校でもほぼ同様の傾向にある。この表から推測すると、今後多くの退職者が増えると予想され、教員養成系大学・学部は、優秀な教師の養成を量・質ともに達成しなければならない。一方で、この年齢構成に鑑みると、大学を卒業し新任教師として赴任したとき、同じ学校内で悩みや問題を相談し、解決の糸口を導くような年齢の近い同僚教師は少なく、授業に限って言えば、教授方略や技術を磨き高め合う仲間が少ないと言えよう。換言すると、自らが授業を反省的に実践し問題に気づき、解決する方法を

知っておく必要がある。例えば、多くの新任教師は、はじめに授業を円滑に進めることができずに悩む。その解決の方法として、授業ルーチン^{注1)} 取り決めることが挙げられるが、経験豊富な教師はルーチンについて明確に指示するとともに、より肯定的・具体的なフィードバックを十分に与えていたことが明らかにされている(福ヶ迫ほか, 2005; Fink and Siedentop, 1989; 香川・吉崎, 1990)。このような授業方略や技術を学び、教科教育学の授業で行う模擬授業^{注2)} や教育実習等で実践する機会を教員養成系大学・学部は潤沢に保障しなければならないだろう。

本研究で中心的な研究対象となる2006年度後期「体育科教育A」^{注3)}を受講した学生56名は教育実習をすでに経験している。しかしながら、教育実習校で体育授業を指導した学生は16名、一度も指導しなかった学生は40名であった。つまり約70%以上の学生は一度も体育授業の指導経験を保障されずに大学を卒業し、新任教師として小学校で体育授業を行うのである。また、「指導した」と答えた学生の指導実態を聞くと、「1回のみ行った」「TTとして参加した」など積極的な参加とは思えないものも多かった。したがって、「体育授業像とは?」という問いに対するこれらの受講生の答えは、福ヶ迫(2007)が示していることと同様に、「楽しい」「遊び」「できる子どもだけの授業」「教師は見えてい

るだけ」など、決してよいイメージとは言えない。

模擬授業は、講義形式の授業で学んだことを実践的に確かめ、さらなる展開にその意義がある。「教師教育のカリキュラムの中で強調されるのは、教師の実践的能力 (performance competency) の育成ということであるが、このことはただちに教師の専門的・学問的能力 (knowledge competency) の排除を意味するものではない。両者の統合カリキュラムが強く求められていると受けとるべき」(小金井, 1980) だからである。そこで本研究では、模擬授業が体育専攻学生ではない小学校教員養成課程学生の授業省察能力に与える効果を検討するとともに、実践的で即戦力としての教師を育成することを目指した授業プログラムについても検証することである。

II. 模擬授業を取り入れる意義

先述したように、2006年度後期の「体育科教育A」を受講した学生の約70%以上が教育実習で体育科の授業を行っていない。教育実習の実態について、日野らは、2003年に中国四国地区の7つの教員養成系大学での小学校教育実習に参加した学生(314名)を対象に質問紙調査を実施した(日野・刈谷, 2006)。その結果、教育実習生の約半数が「体育授業で実際に指導していない」「体育授業の指導計画に参加していない」「体育授業の指導案を作成していない」「体育授業の反省会に参加していない」といった実態が確認された。本

研究の対象となった学生とはほぼ同様の結果である。教育実習は、教科指導の実践的経験を踏むのに大変有効な場であるものの、複数教科の指導が求められる小学校での教育実習ではすべての教科を網羅することの困難さがうかがえる。

他方で、大学で行われる教科教育学の授業が教員の専門領域や座学の授業で終始するという指摘もある(日野, 2006; 高橋, 2003)。無論、講義形式の授業と模擬授業を両立すれば、直ちに「即戦力としての新任教員養成」と「実践的な能力を持った教員の養成」ができるわけではないが、先行研究からも計画的に行えばその効果があることは明らかである(日野, 2002; 吉野, 2003; 細越・福ヶ迫, 2004; 福ヶ迫, 2007)。とりわけ、体育科教育学の授業に限って言えば、高橋(2000)が提唱するよい体育授業の基礎的条件である「授業の勢い」や「授業の肯定的雰囲気」についての認識が高くなり、教授技術が高まることが報告されている。

福ヶ迫(2007)は、2005年後期、2006年前期に模擬授業を取り入れた「体育科教育A」の授業を実施し、その効果を以下のようにまとめた。

- ・体育授業観が変容する。
- ・体育授業観察力を育成することができる。
- ・授業を改善する力を育成できる。

特に、体育授業の観察力については、映像を用いた観察力テストで分析を行っている。その方法は、日野ら(1996)によって作成された「観察者のチェックリスト」を用いて同じ映像による体育授業

表1 テスト映像による観察者チェックリスト結果の比較

	pre-test		post-test		N=51	N=51
	M	SD	M	SD	t値	p値
1 教師の積極的な関わり	2.29	0.76	2.13	0.76	1.35	1.96
2 教師の心を込めた関わり	2.32	0.64	2.00	0.60	3.48 **	7.78 *
3 教師の適切な助言	2.20	0.75	1.75	0.67	4.26 ***	10.89 **
4 学習成果を生み出す教材	2.71	0.91	2.18	0.81	4.05 ***	11.12 **
6 楽しく学習できる教材	3.00	0.95	2.48	0.83	4.24 ***	9.74 *
7 子どもの意欲的な学習	3.75	0.74	3.41	0.80	2.96 **	5.63
8 笑顔や拍手、歓声の表出	3.55	1.04	3.07	1.02	3.64 **	7.13
9 自主的な学習	3.50	0.89	3.27	0.75	2.04 *	5.08
10 スムーズな授業展開	2.88	0.76	2.50	0.87	2.71 **	6.35
11 移動や待機の場合	2.91	0.96	2.59	0.95	2.34 *	3.76

(* p<.05 ** p<.01 ***p<.001)

を講義2時間目と15時間目に観察し、その項目について平均値の差の検定と独立性の検定を行った(表1)。その結果、質問項目1以外は、総じて2時間目に比べ15時間目が低くなっていることが分かり、学生がVTRを厳しく評価するようになったことが分かった。また、チェックリストの得点比率に差があるか独立性の検定を行い、2・3・4・6項目について差が認められ、得点の分散は2時間目に比べ15時間目が収束していた。つまり、学生が体育授業を厳しく評価すると同時に、学生間の評価視点に一定のコンセンサスが得られたと判断できる。この結果は、高橋・野嶋(1987)の研究を追証している。また、福ヶ迫(2007)は、受講者のアンケートから模擬授業での観察者が高く評価されていると述べている。模擬授業の実際は、人的条件からすべての学生に十分な指導経験を保障できない。しかし、学生は、ただ「授業を行うのは難しい」や「良い経験ができた」で終わるのではなく、分析視点について、講義と模擬授業を連結することによって、良かった点、悪かった点、改善すべき点を具体的に示すことができ、「計画」→「実践」→「評価」→「再構成」のサイクルの基礎を獲得できた。高橋・野嶋(1987)が授業観察力の育成が教授技術の習得に不可分の関係にあると述べているように、授業観察力を高めることは「授業を再構成するための評価力」を向上させることであり、体育授業を反省的に実現するのに欠かすことのできない力量と判断できる。つまり、教育実習の実態や模擬授業を取り入れた授業の成果を踏まえると、他専攻学生が履修する「体育科教育A」の授業に模擬授業を取り入れて、講義形式の授業と共に両輪として行うことは望ましいことと考える。

一方で、福ヶ迫(2007)は、模擬授業における指導経験の保障にも力を入れていた。ここでは詳細を記述しないが、模擬授業を場面ごとに指導させるなどの手立てを行なったものの、それに見合う十分な成果をあげていない(図2)。それは、①学生数が60名以上であること、②授業時間数が15

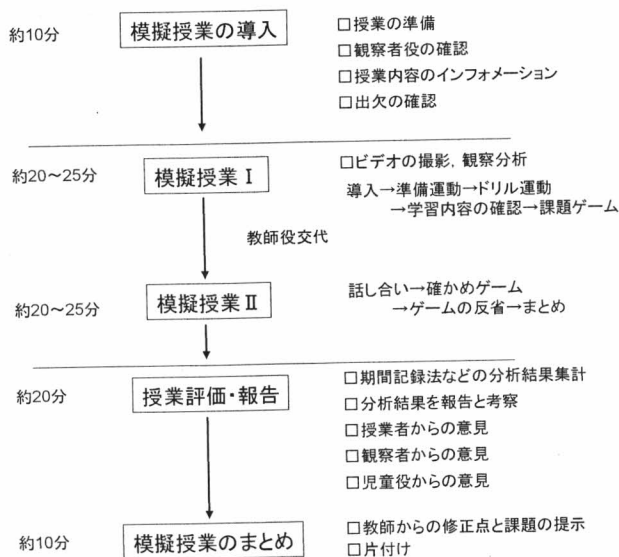


図2 2006年度前期における模擬授業の流れ

時間と限られており、教えるべき内容が達成されないこと、③施設が他の授業との関係から優先的に利用できないこと、④担当する教員が1名であり十分な指導体制になっていないことが関係しており、すべての学生に教師役を保障することが困難であり、わずかな経験がどの程度学生の教授技術の向上につながるか不確かなためである。また、教育実習や現場に出てからの数週間の経験以上のことは保障できない。さらに、学生のアンケートから以下のような改善点が挙げられた。

- ⑤模擬授業の反省会に費やす時間が十分でない。
- ⑥授業内での講義内容が膨大な量のため、整理できない。
- ⑦教師役の意見や反省を共有できない。

7つの反省を考慮するとともに、「経験を重視するのか」「それ以外の方法で行えるのか」などを踏まえ、2006年度後期「体育科教育A」の授業内容を編成した。「体育科教育A」では、限られた授業時間内に上述した問題を解決し、体育科に関する「即戦力としての新任教員養成」と「実践的な能力を持った教員の養成」を行なわなければならない。また、小学校教員養成ではその多くが体育科以外を専攻して入学した他専攻学生であり、実際の小学校現場で体育を教える多くの教師も大学で体育を専門として学んでいない。愛知教育大

表2 2006年度後期「体育科教育A」の講義内容

授業	内 容	授業	内 容
1	ガイダンス 授業予定、模擬授業班分け、模擬授業の説明、アンケート	8	反省・討論会① 模擬授業①の分析、②への修正
2	講 義 学習の勢いを生み出すためには？	9	模擬授業② ハの字型ハンドボールゲーム
3	講 義 肯定的な学習の雰囲気を生み出すためには？	10	反省・討論会② 模擬授業②の分析、③への修正
4	講 義 授業中の教師の役割、学習形態	11	模擬授業③ ハの字型ハンドボールゲーム
5	講 義 素材と教材の違い	12	反省・討論会③ 模擬授業③の分析、①～③で変容した教師行動
6	講 義 グループで教材づくり(プレゼンあり)	13	講 義 さまざまな教材、わかるとできる
7	模擬授業① ハの字型ハンドボールゲーム①	14	講 義 指導案と実際の授業

学の初等教育教員養成課程には、理科、社会等12専攻あり、体育科はその中の1専攻である。初等課程の学生数は1,391名で他専攻学生が1,265名(91%)を占める(2006年度)。初等課程の90%以上の学生が体育科教育学を「教育課程及び指導法に関する科目」として15時間学び、新任教師となり学校現場で指導する。つまり、小学校現場で数多くのよい体育授業を生み出すためには、第一に小学校教員課程段階における限られた授業時間での学習内容が重要であり、体育授業の「構想力」や「実践力」を複合的・合理的に養成できる授業プログラムが必要なのである(福ヶ迫, 2007)。

Ⅲ. 模擬授業を取り入れた授業の効果

表2は、2006年度後期の「体育科教育A」の授業概要を示している。筆者は、2005年度後期と2006年度前期の反省とともに、先行研究の結果を踏まえ、模擬授業で多くの学生に指導経験を保障するのではなく、模擬授業を通じて「計画」→「実践」→「評価」→「再編成」のサイクルを学習させ、体育授業を省察できる基礎的能力を高めることに重点を置くことにした。また、2006年度前期から継続して、講義形式の授業では、高橋ら(2007)によって作成された

「すぐれた体育授業を観る」のDVDによる映像をもとに行った。このDVDは高橋らが長年にわたって体育授業研究を進め、授業のねらいが鮮明で、効果的な教材が適用され、子どもたちが意欲的に学習していて、大きな学習成果を収めている「よい体育授業」の典型例が収録されている。その内容は、教材づくり(技術篇、戦術篇)、授業の進め方(仲間づくり、指導スタイル)、教師の教え方(指導行動、授業の約束づくり)で24のすぐれた体育授業が収められている。模擬授業形式の授業では、模擬授業と反省・討論会をそれぞれ繰り返し3回行った。また、これまでの授業と最も異

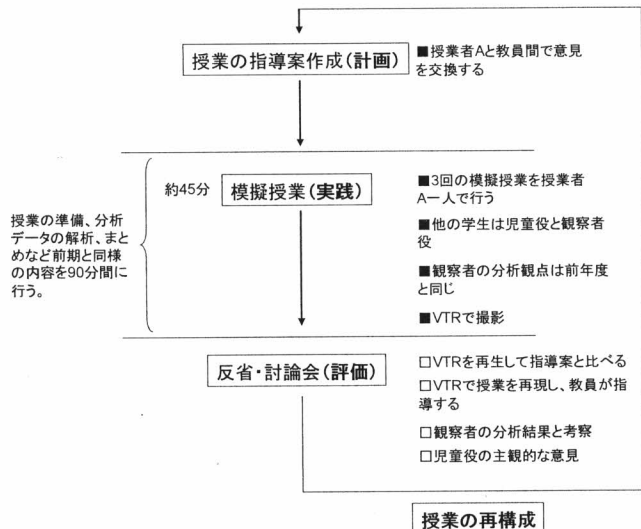


図3 2006年度後期の模擬授業形式の手順

表3 授業者Aのリフレクションシートへの記述内容

1時間目

今回の授業で、私が一番気をつけたことは、とにかく動き回ってたくさん声かけをしていくということです。先生がひとつの場所に立ち止まって指示を出すのではなく、自分から子どもたちに近づいていく子どもたちに伝えたいこと(今回は、パスを一人の児童に偏ってしまうのではなく、みんなであまく回していくことと、スペースを効率よく使っていくこと)を伝えていきたいと思いました。しかし、先生が指導してしまうのではなく、ヒントを出すという形で、児童自ら気づいていくという授業をしていきたいと思いました。

反省点としては、児童役の人たちになかなか声が届かなかったということです。声が途切れることなく常に私が声を出して、声を出すこと、コミュニケーションをとることを重要視していきかけたのに、今回はなかなかうまくいきませんでした。体育館という広い中、スポーツに熱中している児童に声を、気持ちを届けるのはとても難しいことだと感じました。どうすればうまくいきますか?しかし、最後の反省の時には、声がたくさん出せてよかったという意見が出ていたので、少しは私の気持ちは伝わったのかな?ということを感じました。

2時間目

今回の授業で私が気をつけたことは、前回指摘されたアドバイスの点です。具体的にアドバイスをすること、どこがいけないのか、いいのかということに対戦相手と比較させたり、こうしたらうまくいくよといったりして声掛けをしました。また、作戦がうまくいかないチームに注意してたくさん時間をかけ、勝てるような声かけをしました。

今回の反省点は、作戦がうまくいかないチームにアドバイスをするという点で、言ってもなかなか思うようにできないチーム、言ってもいうことを聞かないチーム(人)があったので、このときの対応が次の目標だと感じました。また、指示の場面では、もう一度みんなに詳しく言うというのもしないといけないということがわかりました。

具体的なアドバイスの例としては、

1. うまくいっているチームと、自分のチームの一回のボールがまわる数を数えてごらん。
2. ボールを持った人のところにみんなが動いてもらいにいっているよ。

などです。自分も見ている気づいたのですが、うまいチームとの差はここにあると感じました。

3時間目

今回の授業では、今までの反省で抽出グループのフォローをするということに気がつけました。今までの反省点を少しずつクリアすることはできたと思いますが、回を重ねるごとに自分の指導の荒さがわかってきたので、もっともっと勉強をしないといけないと痛感しました。そして、私自身の力が足りないのでなかなかうまくいかなかったのですが、体育の授業をどのように進めていけばいいのかということがわかったような気がします。また、指導技術をもっとつけて、もっとうまい授業ができるようになりたいと思いました。

教師になったときには、今回学んだことを発揮できるようになりたいと思います。本当にありがとうございました。

なる点は、教師役の学生(以下、「授業者A」とする)を1名に限定して行ったことである(図3)。それ以外の学生は、観察者と児童役を交互に行った。観察者役にはこれまでと同様に、期間記録法、off-task行動、教師のフィードバック行動(高橋ほか, 2003)といった組織的観察法を行わせ、反省・討論会でそのデータ結果とそれから考察できることを発表させた。また、反省・討論会ではビデオで撮影した模擬授業を流し、指導案と照らし合わせながら検証し、授業計画と実際の授業のズレについて、その時の授業者Aの意思決定を語らせるとともに、筆者が良かった点や改善すべき点を説明・指摘した。

このような一連の模擬授業を通じて、授業者Aには毎回リフレクションシートへ自由に記入させた。その記述内容は表3のとおりである。授業者Aは1時間目の記述にあるように、「声をかけるこ

と」が第1の目標になっており、それを実行しようとしていたようである。実際、教師のフィードバック行動の頻度を見ると、その数は一般的な学生が行うそれを大きく上回り、教育実習で指導経験があったこともあり、豊富であった。しかし、その内容は具体性に欠け、フィードバックの量が目向き、すべてのグループ(チーム)を一定の流れでぐるぐると回り、声をかけていた。これに関連する指摘は、第1回目の反省・討論会で学生の分析や意見からも出されていた。それを踏まえて行った2時間目後のリフレクションシートには、その記述内容も具体的になり、「授業中に何を見るのか」「どのような言葉をどのようにかけるのか」に気づき、実行しようとしていたようである。第3回目後のリフレクションシートには、3回目(最終回)ということもあり、自分自身の教授技術のレベルについての記述が多かった。しかし、

表4 授業者Aを除く学生のアンケート結果（学んだ点・良かった点）

No.	学んだ・良かった点
1	学習の勢い、肯定的な雰囲気、教材づくりなど講義で学んだことが理解できた。
2	マネジメントに費やす時間やオフタスクを減らすことが3回の授業の流れで分かった。
3	反省会をすることで、他のみんなの意見が聞くことができたし、じっくりとその授業を振り返ることができた。そして、その反省を生かして次の授業に挑めたのではないかな。
4	3回やってもそれぞれ反省することがあって、反面教師ではないが、自分が教師になった時を置き換えて考えやすかった。
5	反省会では、授業者としての視点から授業を振り返ることで「自分だったらどんな発問や声かけができるだろう」などと考えることができて勉強になった。
6	前回やったことを反省会でしっかり振り返ることができれば、次の授業で生かすことができた。
7	前回の反省点を改善するという方式だったので、成果が目に見えて分かった。
8	授業者A君の声かけの変化などが回を追うごとに変わっていくのがわかりよかった。
9	教師役が改善しても、新たに改善点が出てくるというよい体育授業づくりへの道の長さを学んだ。
10	実際に行った毎回の授業をビデオで見ることによって、今まで頭の中で思い描いていた理想の授業と大分違うことに気づいた。また、単にビデオを鑑賞するのではなく、先生（筆者）が効果的に途中で解説や注意事項を挙げてくれたのがよかった。
11	授業を反省的に改善できて、このように一つ一つの授業を丁寧に見直していくことが大切だと学んだ。
12	自分たちが行った授業を分析したり、ビデオで見たりして、反省することで、「どうしたらもっとよい授業になるのか」ということを意識できるようになった。
13	模擬授業形式の授業を通じて、私は授業とは二度と同じ授業ができないと感じた。これから先、幾度となく授業を行う上で、反省することは大切なことだと思います。
14	はじめは声かけも抽象的であったが、回を踏むことで具体的になり、そうすることで子どもの動きや意識も高くなり、オフタスクが減ったと実感した。
15	反省会を繰り返し開くということは、授業を3回続けてから反省会を開くよりも、1回1回の授業における進歩が大きいと思った。

表5 授業者Aを除く学生のアンケート結果（改善すべき点）

No.	改善すべき点
1	3回目の反省会では、内容が重複している部分が多かった気がする。
2	教師役はいつも同じだったので、他の人の授業も観察できたら新たな発見があったと思う。
3	反省会で終わるのではなく、それまで改善すべき点や良かった点をなどをまとめ、最後は授業という形で終わればよかった。
4	模擬授業を踏まえて、先生（筆者）の授業が見たかった。
5	全ての模擬授業でグループが変わったので、「前回～だったから、今回は・・・しよう」というのができず、指導する側もグループの把握から取り組むため、継続的な指導が難しかった。
6	教師と生徒役が同じ大学生であったため、教師役側が気を使っていたように見えた。
7	生徒役が役になりきれていなかった。
8	回を重ねるごとに演じる側の態度が「慣れ」になり、よい体育授業を考える上で妨げになった。
9	オフタスクをとる役や非協力的なグループなどを置き、条件を加えることでもっとわかりやすかったのではないかな。
10	教師役の負担が大きいので、ローテーションにしては。
11	児童・生徒役の負担が軽すぎる。
12	毎回チームが変わるので、前回の反省や作戦が生かされなかったのがどうかと思った。
13	先生が教師役をして模擬授業をしてほしいかった。

このように授業を省察し、更なる発展を望む、または気づくことに模擬授業の効果があったことを裏付ける。また、これらの反省や成長を他の学生が反省・討論会で共有することは、「計画」→

「実践」→「評価」→「再編成」といった授業を反省的に分析し、授業を改善しようとする省察能力を向上させると考える。

次に、模擬授業で教師役を行わなかった学生

(観察者・児童役)のアンケート結果について示したい。このアンケートは授業15時間目に「授業1→反省・討論会1→授業2→反省・討論会2→授業3→反省・討論会3」で行った模擬授業形式の授業で学んだ点・良かった点・改善すべき点を自由に記述させた。記述内容から判断すると、おおむね肯定的に捉えていたといえよう(表4)。とりわけ、「6. 前回やったことを反省会でしっかり振りかえることができれば、次の授業で生かすことができた。」「9. 教師役が改善しても、新たに改善点が出てくるというよい体育授業づくりへの道の長さを学んだ。」「11. 授業を反省的に改善できて、このように一つ一つの授業を丁寧に見直していくことが大切だと学んだ。」「13. 模擬授業形式の授業を通じて、私は授業とは二度と同じ授業ができなれと感じた。これから先、幾度となく授業を行う上で、反省することは大切なことだと思います。」などのように、授業実践と省察を繰り返す行うことによって、実践力が高まることを認識しており、実際に模擬授業で教師役を行わなくても授業の基礎的省察力が高まったといえる。また、それは「4. 3回やってもそれぞれ反省することがあって、反面教師ではないが、自分が教師になった時を置き換えて考えやすかった。」「12. 自分たちが行った授業を分析したり、ビデオで見たりして、反省することで、『どうしたらもっとよい授業になるのか』ということ意識できるようになった。」といった記述があるように、授業者Aを自分自身に置き換えて「自分ならどうするか」と思考する機会を反省・検討会で確保されていたことを意味する。上述したこと以外にも、模擬授業と反省・検討会を繰り返す行う方法や講義形式の授業内容に合致した分析をすることの効果についても肯定的に記述していた。

しかしながら、2006年度後期の授業にもいくつかの改善点が指摘されている(表5)。1つは、授業者Aを除くすべての学生に観察者役と児童役を経験させるために、毎回の授業で観察者役と児童役を入れ替えた。それにより、授業者Aの指導内容に偏りやばらつきを際立たせた。2つ目は、教師役を授業者Aに固定したため、他の学生が経験できなかったことである。3つ目は、学生間で教

師・児童役を演じたために「遠慮」や「慣れ」が生じて、3時間目の授業では、1時間目以上の新鮮さに欠けていた。加えて、その改善策として筆者や現場教師の授業を体験したかったという声も挙がった。

いくつかの改善点は挙げたものの、おおむね2006年度後期の授業方法(プログラム)は学生に肯定的に捉えられているとともに、アンケートや授業者Aのリフレクションシート等を踏まえると、2006年度後期の「体育科教育A」では授業の省察力を高めることができたと判断できる。また、1名の学生(授業者A)だけに教師役を行わせた2006年度後期の「体育科教育A」はすべての学生に教師役を経験させる授業プログラム以上の効果が得られたのではないかと推察できる。

Ⅳ. 反省的実践力の効果を高める実践方法の可能性

学生による模擬授業の効果はこれまでに述べたことから明らかなように、体育授業の分析力を高め、反省的に授業を実践する資質の育成に効果があるといえる。ただし、それは、無計画に行うのではなく、あらかじめ模擬授業において分析項目を示したり、講義形式の授業で理論的枠組みを示したり、模擬授業を行う方法自体を焦点化したりするなどの仕掛けが必要である。しかしながら、2006年度後期の「改善すべき点」にも挙げられているように教師役と児童役が大学生であることの弊害や、よい体育授業を体験したいという願望を改善・充足すると、さらに模擬授業の効果が発揮されることが考えられる。

そこで、2007年度前期より、現場教師による講義と模擬授業を取り入れるように計画した(表6)。ただし、今回の実践に限っては体育科教育Aの授業ではなく、体育専攻学生(中等)が履修する保健体育科教育学の授業で実験的に行った。その理由は、授業を部分集中授業的に行うこと、現場教師を招集して授業を行うこと、集中授業で体育施設を休日に利用することなどこれまで行ったことのない方法が多く、学生と情報を共有しやすい状況になければならなかったためである。実際の授業では、現場教師より、教育現場の実態や体育教

表6 2007年度「体育科教育A」の講義内容

回数	内 容	回数	内 容
1	ガイダンス	8	講 義
	授業予定、模擬授業班分け、模擬授業の説明、アンケート		授業を分析する
2	講 義	9	実 技
	学習指導要領、体育目標の変遷、学習内容		わかるとできるⅠ(陸上運動)
3	講 義	10	実 技
	よい体育授業とは？		わかるとできるⅡ(ボール運動)
4	講 義	11	集中講義
	教材づくり(技術、戦術)		現場教員による事前指導
5	講 義	12	集中講義
	授業の進め方(仲間づくり、指導スタイル)		現場教員による模擬授業
6	講 義	13	集中講義
	教育現場の実態と新人教師に求められること		現場教員と担当教員による指導
7	講 義	14	講 義
	教師の教え方(指導行動、授業の約束づくり)		よい体育授業を実践するために

師の役割や仕事内容について、90分間講義を行い(6時間目)、そして、熟達した教師の指導方略・技術・方法について、実際に模擬授業を通じて学習することを目的に行う。現場教師(水野邦夫教諭)は、愛知県で15年以上中学校での指導経験を有し、学会等にも積極的に参加する意欲的な教師に依頼した。しかしながら、実際は、模擬授業予定日に台風が襲来し実現できなかった(資料1)。2007年度前期に依頼した水野氏は、指導力があり愛知県でも有数の中学校保健体育教師であるため、現在管理職に就いている。したがって、突発

的な出来事に対応する振替日を予定できず、現場教師による模擬授業は実現に至らなかった。2007年度後期では、筑波大学附属小学校で20年以上の指導経験を持ち、現在、びわこ成蹊スポーツ大学教授である松本格乃祐氏に依頼した。松本氏とは数回にわたり日程の調整を行うとともに、振替日を組みやすい期間に模擬授業を行うように設定した。

これらの実践については、次年度の報告書に掲載したい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費(若手研究(B)他専攻学生を対象とした体育授業構想力と実践力の獲得するための授業プログラムの開発、研究代表者: 福ヶ迫善彦, 課題番号: 19700489)の補助を得て行われた。

資料1 2007年7月15日中日新聞朝刊より抜粋



注

注1)

吉崎 (吉崎静夫, 1997) は「授業ルーチンとは、授業がもつ認知的複雑さを軽減するために、教師と子どもとの間で約束され、定型化された一連の教室行動のことである。そして、この教室行動は、同じような授業状況において繰り返し出現する。」と定義している。体育授業について換言すると、教師の話を聞く姿勢や学習カードの配布の仕方など他教科と共通するルーチンもある。一方、体育授業は、固定の椅子や机がない広い体育館や運動場で、マットやボールといった教具を用いながら学習が展開される。したがって、他教科とは異なるルーチンも多く、例えば、教師のホイッスル (合図) に対する行動、集合や離散の仕方、運動服への着替えの仕方や場所、用具の使い方、出し方、片づけ方、ボールが隣のコートに入った時の行動などがそれである。

注2)

模擬授業とは、マイクロティーチングとも言われ、制限された課題領域で具体的な焦点を持ち、少人数の生徒を対象にして行われる。本来は、実際の生徒・児童を対象に、5～15分程度の時間内にある教授技術や課題を設定し行われる。

注3)

体育科教育Aは、初等教育教員養成課程の教科教育科目であり、体育専攻学生ではなく他専攻学生 (数学、国語、家政といった教科を専攻する学生) を対象に、専門諸科学と教育科目との関連において、体育科の目標、内容、学習指導法評価等の基礎的な理解と相互の関連についての研究を図り、教科教育の理論並びに実践に関する判断力、創造力の育成を目的に開設されている授業である。

引用参考文献

福ヶ迫善彦・鄭ジュ赫・米村耕平・細越淳二・高橋健夫 (2005) 小学校体育授業における教師のマネジメント方略に関する検討ー特に、ボール運動単元の分析からー。スポーツ教育学研究25 (1) : 27-42。
福ヶ迫善彦 (2007) 愛知教育大学での実践例。平成

16～18年度科学研究費補助金報告書。研究代表者 高橋健夫。課題番号16300193, pp.76-89.

日野克博・高橋健夫・伊與田賢・長谷川悦示・深見英一郎 (1996) 体育授業観察チェックリストの有効性に関する検討ー特に子どもの形成的授業評価との相関分析を通してー。スポーツ教育学研究16 (2) : 113-124.

日野克博 (2002) 体育教師教育カリキュラムの検討ー愛媛大学での模擬授業の実践例にしてー。第22回日本スポーツ教育学会口頭発表。2002.11

日野克博 (2006) 変わる教師養成教育のいまー愛媛大学を例にしてー。体育科教育 : 54 (3) : 14-17.

日野克博・刈谷三郎 (2006) 質問紙調査による教育実習生の意識の実態把握。実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究。平成15～17年度科学研究費補助金報告書。研究代表者 木原誠一郎。課題番号15300214, pp.119-132.

細越淳二・福ヶ迫善彦 (2004) 国士舘大学文学部における模擬授業実践ー特に、授業展開と教師の相互作用に関する教授技術の習得に着目してー。第24回日本スポーツ教育学会口頭発表。2004.9

Janet Fink and Daryl Siedentop (1989) The Development of Routines, Rules, and Expectations at the Start of the School Year. Journal of Teaching in Physical Education 8 : 198-212.

香川文治・吉崎静夫 (1990) 授業ルーチンの導入と維持。日本教育工学雑誌14 (3) : 111-119.

小金井正巳・井上光洋・児島邦宏・稲森京子・葛西英昭・原健爾・野田一郎 (1980) マイクロティーチングによる教育実習プログラムの開発と評価。日本教育工学雑誌4 (3) : 113-126.

シーデントップ: 高橋健夫ほか訳 (1988) 体育の教授技術, 大修館書店, 東京. <Siedentop, D. (1983) Developing Teaching Skills in Physical Education (2nd ed). Mayfield

Publishing Company: California.>

- 高橋健夫(2000)子どもが評価する体育授業過程
の特徴－授業過程の学習行動及び指導行動
と子どもによる授業評価との関係を中心に
して－. 体育学研究45(1):147-162.
- 高橋健夫(2003)体育教師はどう変わるべきか.
体育科教育:51(4):12-16.
- 高橋健夫編著(2003)体育授業を観察評価する.
明和出版:東京, pp.103-106.
- 高橋健夫・小松崎敏・吉野聡・日野克博・吉永武
史・細越淳二・米村耕平・福ヶ迫善彦(2007)
「すぐれた体育授業を観る」. 筑波大学体育
科教育学研究室.
- 高橋哲郎・野嶋栄一郎(1987)教育実習事前学習プ
ログラムの開発とマイクロティーチングの
改善に関する研究. 日本教育工学雑誌11
(2/3):57-70.
- 吉野聡(2003)教育実習生を対象とした小集団教
授練習の効果に関する研究－授業場面, 教
師行動, 生徒行動の分析を中心に－. 第23
回日本スポーツ教育学会口頭発表. 2003.10
- 吉崎静夫(1997)デザイナーとしての教師アクター
としての教師. 金子書房:東京, pp.24-26